



ADRC Highlights

Asian Disaster Reduction Center Monthly News

Vol. 361
April
2023

トピックス

メンバー国との協力推進

アジア防災会議2022：開会式、特別セッション

関係機関との協力推進

JICA国別研修「マレーシア LEP2.0災害リスク管理能力強化」コースの実施

ADRC客員研究員レポート

¶ アニ・ゲヴォルギャン
(アルメニア)

¶ アリウトウンガラ
グ・バトジャルガル (モン
ゴル)

Asian Disaster Reduction Center アジア防災センター

〒651-0073
神戸市中央区脇浜海岸通
1-5-2 東館5F

Tel: 078-262-5540
Fax: 078-262-5546
editor@adrc.asia
https://www.adrc.asia

© ADRC 2023

●メンバー国との協力推進

アジア防災会議2022：開会式、特別セッション

2023年3月10日から12日にアジア防災会議2022（ACDR2022）が宮城県仙台市の仙台国際センターで開催されました。今回は、メンバー国や関係者など幅広く参加が出来るよう、オンラインでも参加が可能なハイブリッド形式で対応されました。最終的に、ACDR2022には、メンバー国、国際機関、民間企業、研究・学術機関などから、現地参加として84人、オンライン参加として121人、合計205人が参加しました。



ACDR2022の現地参加者

ACDR2022では、「WHAT IS NEXT? -過去に学び、未来に備える-」と題して、国レベルの防災システムをさらに強化するために、過去の教訓をリスク情報に基づく備えの取組みに生かすことの重要性について議論されました。また、ADRCのメンバー国やパートナー組織が、同時多発的な危機や将来の災害を予防、準備し、適切に対応し、互いのDRRプログラムをどのように活用できるかを明らかにするために、（1）東日本大震災の経験に基づいた災害管理システムの強化、（2）メンバー国における最近の大規模災害の経験と教訓の共有、（3）複雑で重複する災害に備えるためのメンバー国やパートナー組織の新しい取組みやアプローチ、について協議することを目的としました。

ACDR2022のプログラムについては、2023年はわが国の首都東京を襲った関東大震災から100年目の節目にあたることから、関東大震災に関する特別セッションを設けました。また、セッション別のテーマとして、1）大規模災害とその対策、2）仙台防災枠組の取組みにおけるデータ連携の拡大 -GLIDE (Global Identifier Number) の利用促進、3）衛星を活用した防災・危機管理情報の提供、の3つを取り上げました。

今月号では、会議冒頭の開会式の様子と、特別セッションについて報告いたします。

続き

開会式

開会の挨拶では、まず谷公一内閣府特命担当大臣（防災）がACDR2022開会に際し、東日本大震災およびトルコ及びシリアで発生した大規模地震災害について哀悼の意を表され、2003年より開催されている本会議の重要性について述べました。次に濱田政則ADRCセンター長は、ADRCは1998年の設立以来、災害リスク削減に向けた、多国間協力、支援を進めてきたが、世界およびアジア地域において、災害リスクは増加傾向にあり、加盟国が協力や連携を深め、安心安全な社会づくりに寄与できると強く信じていると述べました。最後に郡和子仙台市長は、冒頭にトルコ及びシリアで発生した大規模地震災害について哀悼の意を表され、東日本大震災の経験も踏まえながら、多発する地震や津波、激甚化する風水害などのリスクに備えるため、参加者がそれぞれの思いや知見を共有し、繋がるのが大切なことであると述べました。また、今回現地参加できなかったトルコのカウンターパートである内務省災害危機管理庁（AFAD）長官からのメッセージを、笹原顕雄ADRC所長が代読しました。



開会式の様子（左から、谷公一内閣府特命担当大臣（防災）、郡和子仙台市長、濱田政則ADRCセンター長）

特別セッション

特別セッションは、3つのパートで構成されました。最初に、発生から100年を迎える1923年の関東地震の教訓とその後の対策、続いて1995年の阪神・淡路大震災と2011年の東日本大震災での新たな知見と残された課題、最後に災害が多いアジア地域の被害軽減のために活かすべき教訓や技術について議論や提言が行われました。

ADRC会長の伊藤氏は、安全な街づくりや現代の都市デザインは、関東大震災の復興に触発されていることを紹介しました。また、関東大震災をきっかけとして建築や都市開発が大きくステップアップし、従来、外壁が下見板張りで木がむき出しだった集合住宅はコンクリートの活用が進み、公共建築が充実していったことを説明しました。ADRCセンター長の濱田氏は、関東大震災は日本の地震工学の始まりであるとし、関東大震災では、木造家屋だけでなく、明治維新以来、海外から技術移入されて建設されてきた近代的な建物も被害を受け、これにより建物や構造物の耐震設計が行われるようになったと紹介しました。早稲田大学理工学術員名誉教授の長谷見氏は、第一次世界大戦期の人口急増で木造密集市街地が拡がり、震災時に同時多発的に火災が発生し、多くの家屋が焼失したこと、その経験から、大都市圏では防火対策が導入されていることを紹介されました。常葉大学社会環境学部教授の重川氏は、防災教育の推進と災害リテラシーの向上による「人づくり」の重要性に言及しました。そして、日本は、アジア地域で適用可能と思われるさまざまな経験や教訓を蓄積してきていると述べました。最後に、モデレーターである吉村氏は、パネリストの協議を通して、関東大震災以降、様々な被害の様態に対応できるよう、構造的および非構造的な災害対策が開発・検討・改善されてきたこと、最悪の事態の際の被害を想定し

続き

て事前防災投資を行うようになったことが明らかになった、と述べました。



特別セッションの様子（左から、伊藤滋 氏、濱田政則 氏、長谷見雄二 氏、重川希志依 氏、吉村秀實 氏）

次号ではACDR2022のプログラムである三つのセッションについて詳しくご紹介します。

●関係機関との協力推進

JICA国別研修「マレーシアLEP2.0災害リスク管理能力強化」コースの実施

ADRCは2023年3月6日から10日かけ、JICA国別研修「マレーシアLEP 2.0 災害リスク管理能力強化」コースを実施しました。本研修はマレーシアにおいて災害に強い社会の実現のため、国家防災機関である国家災害管理庁（NADMA）の技術及び調整能力が向上することを目的としています。第1回目となる本研修ではNADMAを中心に、関係機関より計15名が参加しました。

研修初日は研修オリエンテーション、各機関からのカントリープレゼンテーション、ディスカッションを行い、研修目的、各視察先でのポイントの整理と確認を行いました。続いて2日目以降は、洪水や土砂災害対策の現場を精力的に訪問しました。研修員は日本の対策の実際について熱心に学び、質疑、意見交換が活発に行われました。最終日は各研修員が、本研修で学んだ点を報告し、研修を締め括りました。

本研修実施にあたり、視察を受け入れてくださいました各関係機関の皆様には厚くお礼申し上げます。今後とも引き続きご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

●ADRC客員研究員レポート

アニ・ゲヴォルギャン（アルメニア）

私は、アルメニア共和国出身のアニ・ゲヴォルギャンと申します。私は、アルメニア共和国緊急事態省地域地震防災研究所の地震ハザード評価複合部の部長を務めています。この部署は、アルメニアの領土における地震ハザードモニタリングの提供、領土の地震ハザードと地震リスクの評価、地震リスクの低減、発生した地震のレベルの評価、地震ハザードに関連するその他の二次災害の評価という主な目的に基づき活動を実施しています。

アルメニアは発展途上国とされています。私たちは、持続可能な発展に貢献するために、世界中から専門的な科学知識を収集し続けています。ADRCの客員研究員プログラムに参加して学ぶ中で得た理論的・実践的な知識はすべて実務に生かされ、ミレニアム開発目標への資産となることと思います。ADRCの客員研究員プログラムに参加する機会は、この分野の理論的知識と実践的な専門知識を得る上



続き

で、私にとって大きな価値があります。ここで学ぶ日本の方法論は、私の仕事をより実践的なものにし、データ分析に基づく問題解決により集中できるようになるでしょう。このプログラムは、防災・災害対策、災害緊急対応、災害復旧・復興、地震災害軽減のための正しい知識、ツール、技術を習得する絶好の機会であると確信しています。研究期間中に得たものは、私の所属する組織だけでなく、国にとっても大きな意味を持つことになるかと確信しています。

この場をお借りして、ADRCのスタッフには、日本滞在中、親切な対応とおもてなし、そして私が必要とするあらゆる支援を快く提供して下さったことに感謝の意を表したいと思います。

アリウントウンガラグ・バトジャルガル（モンゴル）

私の名前はアリウントウンガラグ・バトジャルガルです。モンゴルから来ました。

私は2003年にモンゴル国立大学を卒業し、モンゴル国立国防大学で修士号を取得しました。現在、モンゴル国立国防大学で博士号取得のために勉強しています。私は、モンゴル国家危機管理庁（NEMA）傘下の国立災害研究所（NIDR）で、化学研究員として勤務しています。

NIDRの主な目標は、災害科学を発展させ、災害保護の分野における研究、分析、技術、イノベーションを導入することで、モンゴルの持続的発展に影響する災害リスクの低減に貢献することです。そのため、災害リスク軽減や防災法の施行とその課題などを研究しています。研究結果に基づき、今後取るべき対策を科学的に判断し、地域社会に向けて発表しています。

また、災害による被害の軽減を目的とした新技術を生み出す分野でも、共同研究や自主研究を行っています。さらに、私は市民や大学生に防災や災害リスク軽減について教えています。

モンゴルについて簡単にご紹介しましょう。中央アジアに位置するモンゴルは、北方にロシア連邦、南方に中国と国境を接する内陸国です。私の住むモンゴルは、広大な平原に5種類の家畜を放牧する遊牧文明を維持する伝統を持つ国です。モンゴルの人口は3,409,939人で、世界でも平均人口密度が低い国です。1平方キロメートルあたり2人強（1平方マイルあたり約5人）となっています。モンゴルの人口は66%が定住し、34%が遊牧民です。

モンゴルの主な災害は、雪害（dzud）、洪水、雪と砂嵐、森林・草原火災、動物の病気、地震です。家畜はモンゴル人の生活、社会、経済において非常に重要な役割を担っており、モンゴルでよく見られる災害は家畜に大きな被害を与えています。

また、近年、全国的に人口の多いウランバートルで新たな地震断層が登録され、大きな不安を感じており、この分野での研究の充実が必要となっています。

モンゴルと日本は古くから友好関係にありました。ですから、日本は私にとってとても親しみのある国です。ADRCの客員研究員プログラムに参加できたことを大変嬉しく思います。ここで学び、身につけた知識を研究に活かしていきたいと思っています。



問い合わせ・配信申し込み

このニュースレターに対するお問い合わせ、またEメールによる配信をご希望の方は
editor@adrc.asia までEメールをお寄せください。